神奈川県立歴史博物館だより

平成30年6月20日発行　通巻208号

JUN. 2018　Vol.24　No. 1

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

コレクション形成の作法　特別展「明治150年記念　真明解・明治美術
増殖する新メディア―神奈川県立歴史博物館50年の精華―」に寄せて …… 2
資料紹介　新収蔵の「相州鎌倉之図」について …… 6
THE けんぱく PUNCH …… 8

コレクション形成の作法

特別展「明治 150 年記念　真明解・明治美術／増殖する新（ニュー）メディア―神奈川県立博物館 50 年の精華―」に寄せて

角田　拓朗

はじめに～２つの数字～

この夏開催の特別展「真明解・明治美術」は、２つの数字がキーワードとなっている。上記タイトルから理解される通り、150 と 50 である。前者は明治 150 年記念という本展の冠、後者は昨年度に迎えた当館開館 50 周年という意味合いである。前者については、展覧会図録にてその意義を美術史的に深く考察することを予定しており、本稿では後者の意味内容について記しながら、本展の概要を紹介していきたい。

この３月、当館は開館 51 年を迎え、『神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館　50 年のあゆみ』を刊行した。同書のなかで、当館近代美術コレクション形成の歩みを稿者なりに端的にまとめている。要点を記せば、横浜に立地することから、幕末明治期に西洋美術に学んだ作品や資料を収集対象とするというものである。つまり、明治期の美術はそのまま当館近代美術の範疇とほぼ重なり、そのコレクションがほぼ明治期で構成されていることから、本展はほぼその全容を示す機会と言い換えることができる。

図①　五姓田義松《井田磐楠像》 明治 15 年
義松滞仏期のなかでも高額売却作品である。

と、淡々と記す稿者の背中には冷汗が浮かぶ。この 4 月で奉職してから 13 年目を迎えたことを考えれば、それなりに館の方針や歴史を熟知していて当然と思われるだろう。しかし、前任者からの引継ぎがなく、今日まで字義通り暗中模索してきた自身の来し方を振り返ると、十分に理解しているとはなかなか言いづらい。そのような頼りなさの一方で、幸いにも、継続的に調査研究、普及展示を実施し、他館からうらやましがられるような収集活動が叶ってきた。コレクション形成の作法を全く身につけていない新人学芸員からの十数年間で、何故、充実した活動が可能だったのか。本稿では、改めて当館近代美術コレクションの歩みの具体像を概観していこう。

購入

コレクション形成の手段のひとつに、購入がある。昭和 42 年の開館以来、しばらくは戦後の経済成長にあわせて館蔵コレクションを豊かにすることができた時期である。記録によれば、開館直前の 1 月には初代五姓田芳柳《池田謙斎像》ほか、同年 3 月には現在でも当館の優品として名高い《井田磐楠像》（図①）などが購入されている。高度経済成長という背景、近代日本美術がまだまだ市場に数多く出回っていたことがその積極的な購入の要因となっていたに違いない。あわせて注意しておきたいのは、当館と同じく神奈川県立になる近代美術館の存在である。同館は昭和 26 年に開館し、高橋由一に代表される明治期の美術を研究対象としていた。同館との差異化を図るという意味で、横浜、明治への集中が図られたと考えられる。

下って昭和 50 年、団伊能コレクションとひそやかに知られていた五姓田義松作品群が一括で購入され、五姓田派コレクションの核となった。当時の文書にも「まとまった数量はスケッチ群が主であるとしても、今後、ほとんど収集の可能性がないものである」と記され、その喜びが読み取れる。これをうけ、当館は五姓田派研究の拠点となり、以後も細々とであるが五姓田派に関連する作品購入が継続されてきた。

加えて、購入という視点から当館コレクションを見て特徴的なのは、チャールズ・ワーグマン（平成元～

図②　チャールズ・ワーグマン
《糧食供給の店のパニック》　1858 年

図④　初代五姓田芳柳《馬図》　明治 9 年
獣医学の教材として制作されたと推定される。

図③　石嶋八重《三人上戸之図》　明治 22 年
石版画特有のアクの強い表現が魅力である。

図⑤　岩橋教章《測絵図譜》　明治 11 年
地図技術ながら美的探求が認められる。

3 年)と石版画(平成 11 年)である。前者は香港のオークションで世に現れ、当時の担当横田洋一氏が八方手を尽くし、バブル景気を背景に当館コレクションとした経緯がある。惜しむらくは日本国内を描いた作品ではないことだが、ワーグマンの中国における確かな業績が把握できる点、そして本作品群を通じて当館が国際的な視点を有することを表明する点で重要であり、その収集は高く評価されてよい。後者も横田氏の仕事になり、収集の成果は平成 13 年の特別展「王家の肖像」となり、同展によりその当時さほど重要視されていなかった石版画の見直しが進む重要な契機となった。なお、同時期に横田氏が個人的に収集した石版画群は、その後平成 21 年に当館に遺贈された。あわせて、当館の石版画コレクションとなっている（『神奈川県立博物館研究報告　人文科学』36 号参照のこと）。

近年購入した最も注目すべき作品は、初代五姓田芳柳《馬図》（図④）である。明治 9 年の国家事業ともいうべき本作は芳しからず状態で購入されたが、幸いにも、昨年度に修復が実施され、この夏の特別展で新たな姿で公開される予定である。乏しい予算のなかでも充実した購入を実現してきたのは、最初期の設定からぶれずに継続してきたからにちがいない。

寄贈

充実した購入活動と並行して、当館近代美術コレクションを支えているのは寄贈である。多くのご厚意があるなかで選択して挙げるのは恐縮だが、柱となっている資料のいくつかをここに記す。

現在ある概要を支える大黒柱となっているのが、平成 23 年に寄贈された橘忠助氏旧蔵美術資料群である。銅版画家西田武雄が収集した資料群を、橘忠助氏に譲り、橘家で半世紀以上大切に守られてきた資料である。西田の興味の出発点である銅版画にとどまらず、五姓田義松資料などの一次資料から、古写真・図書・印刷物など多種多岐にわたるその性格に加え、総計 3,000 点にものぼるその数量から、有識者から同資料群は「今世紀最大の発見」と称された（『神奈川県立博物館研究報告　人文科学』37 号）。本資料群と関連して興味深いのが、当館最初期にあたる昭和 45 年に隈元謙次郎氏からうけた寄贈である。隈元氏から寄贈された五姓田義松書簡群とあわせて五姓田義松史料群が集結したことになり、これまでの継続的な収集活動が大団円を迎えた（拙稿『五姓田義松史料集』平成 27 年）。

以上のコレクションを可能にしている背景は、当館

が「博物館」だからだと稿者は考えている。近代美術という対象は、一般的に「美術館」が扱うことが多い。美術館であれば第一に作品があり、資料類はその付属品ないしは参考品という位置付けに追いやられるきらいがある。しかし当館は歴史博物館ということで、そもそも歴史や考古、民俗という他分野・領域と協同した調査研究事業を日ごろから実践していることから、より作品と資料の垣根が低く、また資料価値をより積極的に見出そうという意識に富んでいる。そのため、資料類を積極的に受け入れる姿勢、あるいは現在時制ではさほど重視されない作品の受入れを重視してきた。それが当館の特色と自認している。

その意識は当館近代美術コレクションに新たな広がりをもたらしている。平成 27 年、下村観山資料群の寄贈を受けた。同資料群は、観山の公文書や私文書を中心とし、作品は少量である。しかし、当館の調査研究を主体とする活動に合致しており、また洋画コレクションを主体としていた当館コレクションに、日本画が加わり、全体に厚みと深みを増す存在といえる。

図⑥　下村観山《画稿貼込帳》 明治 20 年代
東京美術学校在籍時の学習の痕跡。多くの古画、狩野派ややまと絵にも学ぶ態度が認められる。

寄託・借用

寄贈には資料群が多いのと対照的に、寄託では作品が主となっている。ことに近年は、従来の方針を厚くする動向に加えて、新しい方向性を加味する作品が目を引く。短期的に調査研究のため借用する作品も少なく、同様の意図が展覧会前後の借用でもある。

具体的にみると、やはり五姓田派関連の作品群が多く、展覧会が契機となることが多い。平成 27 年の義松没後 100 年展の直前に、五姓田義松作品群一括 63 点の寄託を受けた（図⑦）。展覧会後には義松ばかりでなく、初代五姓田芳柳、二世芳柳などの寄託も受けており、作品相互を当館内部で実際に比較検証できる機会を獲得している。なかでも、渡辺幽香《山崎勢子像》（図⑧）は、義松の妹幽香の数少ない油彩画作品として貴重である。以上、五姓田派が当館を特徴付けるものの、ひろく明治美術に傾注する姿勢が評価されているようだ。それを裏付けるかのように、中丸精十郎や平福百穂など、明治美術に関する寄託申し出が相次いでいる。申し出の経緯は様々あれど、いずれも当館の活動方針への賛意の結果と考えられる。

さて、直近で受け入れた寄託である《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》（図⑨）は、幕末明治の錦絵史を考察する上で最重要の作品であることから、特記しておく。大倉孫兵衛は幕末から活動し始めた錦絵の版元であり、明治前半期、その活動は最盛期を見せた。その孫兵衛自身が、自ら板行した作品をまとめた画帖七冊は、その活動の詳細を今日に伝える根本資料といえる。孫兵衛は、明治期最大の出版大手大倉書店の経営に加え、現在のノリタケカンパニーリミテド、INAX など、幅広く社会に有益な事業を展開した立志伝中の人物であ

図⑦　五姓田義松《風景》 明治初頭
義松渡仏以前と推定される水彩画。明治期の横浜の郊外には田畑や木立が広がっていた。

る。彼にとって横浜は世界を強く意識する契機となった重要な土地であり、かつ彼が最晩年に関与した大倉陶園が現在戸塚の地にあることなどの縁から、このたび当館で寄託を受けることとなった。周知のとおり、当館には丹波コレクションという近世から明治にかけての浮世絵の大コレクションがある。加えて、橘資料群は銅版画から石版画といった近代印刷史を語る重要な資料群である。《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》が寄託として加わることにより、日本の印刷文化史を広く深く理解することができるようになった。

おわりに～プラス１～

50という数字を起点に、近代美術コレクション形成史を概観した。改めて50という重みを考えると、ため息ばかりが出てくる。とはいえ、先達も端から50を体現してきたわけではあるまい。試行錯誤の果てにたどり着いた50だったと想像する。なればこそ、私たちにできるつとめは、＋１だろう。この再開の年が51年目であることも奇縁で、かつ示唆的だ。ひとつひとつ着実に、目の前にある作品や資料に忠実に、間違いを犯してしまうかもという恐怖を乗り越えて、調査研究と公開に愚直に邁進すること、この態度こそ当館近代美術コレクション形成の作法である。

最後に、本展の概要を記す務めが残されているが、以上ご紹介した作品を、明治という視点で、絵画、彫刻、印刷という３つのカテゴリーに分け紹介することが軸である。当館の目玉である五姓田派、眞葛焼、そして木版画・石版画・銅版画。それを素直に提示する章立てである。明治美術のキーワードを、各作品や資料で示し、展示室内でそれらをダイナミックに混交させながら、明治という時代の力強さを表現しようと構成を練っている日々である。

多くの方々の支えの上にコレクションが形成され、その果てに展覧会が開かれる。そして展覧会がまたその後のコレクション形成の起爆剤となる。そうなるよう展覧会に全力を注ぐ所存である。では、この夏もまたまた乞うご期待！

（つのだ　たくろう・主任学芸員）

特別展　明治150年記念

真明解・明治美術／増殖する新（ニュー）メディア

神奈川県立博物館50年の精華

会　期：平成３０年８月４日（土）～９月30日（日）

休館日：毎週月曜日（ただし９月１７日、２４日は開館）

※会期中、一部の作品・資料の展示替がございます。

図⑧　渡辺幽香《山崎勢子像》　明治11年
明治期の高崎の商家である山崎家の刀自を描いた本作の裏面には制作にまつわる詳細が記されている。

図⑨　《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》　明治期
全七冊ある画帖より。ここに紹介するのは、輸出商社森村組の商品製作に孫兵衛の関与と、明治期輸出印刷物の具体像を示す貴重な作例である。

資料紹介　新収蔵の「相州鎌倉之図」について

古宮　雅明

本資料は新出の江戸時代の写本絵図です。縦104cm・横115cm。薄い料紙ですが、虫食いなどはほとんどなく状態は良好です。裏面に「鎌倉圖」「相州鎌倉之圖」（但し「鎌」は「謙」と書かれていますが）と記されており、資料名はこれを採りましたが、絵図中の文字とは明らかに異なっているので、これが本図の原題なのかは判りません。描かれている範囲は、北西は山ノ内、北東は朝比奈、南西は腰越、南東は小坪まで、山ノ内地区を除き、いわゆる鎌倉の出入り口とされる各切通しの内側です。

江戸時代に制作された鎌倉を対象とした絵図には木版による摺物絵図と、手描きの写本絵図の二種類があります。前者は鎌倉の寺社や名所・旧跡の案内絵図で、鎌倉見物に訪れた人に販売・配布されたものと考えられ、形態・内容とも類型化しつつも明治初期まで出版が続きました。そのため初期のもの以外は数多く現存しています。これに対し写本絵図はたいへん希少ですが、本図と非常によく似た絵図が慶應義塾大学図書館（慶應本と略）と神奈川県立図書館（県図本と略）に保管されています。慶應本を紹介された白石克氏は、同様の写本絵図が他に三点確認できること、いずれも共通の元図から派生したものであること、地名表記、図中に記入された文言、谷戸の輪郭線の描き方等から慶應本系と県図本系の二系統に分類できるとされました※。本図がこれに連なる絵図であることは一見して明らかであり、六点目の絵図が見出されたことになります。

本図は谷戸の形状を線で丁寧に辿り、そのラインに

よって丘陵部分と平地部分の区画を明示しています。小さな谷戸もしっかり描かれ、丘陵部は薄緑色の淡彩が施されています。谷戸の地形を、あたかもそうであるかのように「再現」することに意が注がれている絵図といえます。一方、絵地図によくみられるアイコン的表示や絵画的表示がほとんどなく、地名・寺社・旧跡等の情報は文字で記載されています。これらの情報は個別に読み取らねばなりません。文字で記載された情報は百四十ヶ所ほどあります。谷戸の名が最も多く、谷戸の形を詳細に書き表していることと対応しているのでしょう。寺社は主なものはほぼ記載されていますが、なぜか材木座地域では存在するはずの寺社の多くが見られません。鶴岡八幡宮門前から由比ヶ浜に向かう「ヲキ道」(段葛) 両側の平地部もほとんど空白です。

注目されるのは文字情報に相当数の誤表記があることです。これは本図の大きな特徴であり、本図の素性を探るうえでの手掛かりになりそうです。具体例を挙げると（括弧内の記号は図中の位置・正しい表記)、覚圓寺（Ｅ２・覚園寺)、報国寺（Ｅ３・報恩寺)、郡智谷（Ａ５･那智谷)、北谷（Ｂ４･小谷)、櫻谷（Ｃ３･梅谷)、ナマエ谷（Ｅ３･十二郷谷)、サマアシリ（Ｅ２･鞘阿弥陀)、タゝキ谷（Ｅ３・宅間谷)、ウハフイトコロ（Ａ５･姥ヶ懐)、相ヵ谷（Ｅ５･桐ヶ谷)、此金（Ｅ３・比企)、　掟坂（Ｃ３・粧坂＝化粧坂）などです。

文字情報について本図、慶應本、県図本を比較すると、誤表記は本図と慶應本でほぼ共通し、県図本ではおおむね正しく表記されています。またその他の記載情報の有無を見ると、本図は慶應本との共通点が多く、県図本との差異が大きいことがわかります。このことから本図は慶應本に近く、県図本とは遠い関係にあるといえます。一方で本図では誤表記になっていますが慶應本では正しく表記されているところもあります。例えば「此金」は慶應本では正しく「比企谷」と記されています。慶應本の文字は楷書に近く、これを「此金」とは誤読しないでしょう。逆に「此金」を「比企」と正せるとは考えられません。これは両者が直接写し写される関係ではなかったこと、また同じ絵図を写したわけではないことも示唆します。つまり本図と慶應本は親子や兄弟関係ほどは近くはないということです。そして諸本の異同から判断すると、誤表記は本図がテキストとした絵図以前の段階ですでに生じていたと推定できます。

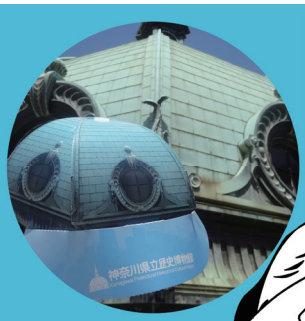
誤表記が生じた原因を推測すると、①文字の類似による誤読（園⇔圓、斗⇔手、梅⇔桜、桐⇔相)、②カタカナの誤読（鞘阿弥陀＝サヤアミタ⇔サマアシリ、宅間谷＝タクマ谷⇔タゝキ谷)、③両者の混合（十二郷→十二江→ナマエ)などが考えられます。さらに「此金」「掟坂」に至っては文字自体が判読できない状態であり、苦し紛れの表記になったのでしょう。とは言うものの、これらの誤表記は鎌倉の知識があれば容易に訂正できるものです。たとえ「覚圓寺」と記されていても「覚園寺」と正せましょうし、文字が判読できなくても鎌倉を知っていれば「掟坂」や「此金」とはしないでしょう。つまり本図を作成した人物は鎌倉についての知識を欠いていたといえます（慶應本も同様であることは白石氏がすでに指摘をされています)。

最後に本図の景観年代（いつ頃のことが描かれているのか）を探ってみます。手掛かりは以下の諸点です。①寛永 13 年 (1636) 創建の英勝寺（Ｄ３)、寛永年間 (1624 ～ 44) 創建の高松寺（Ｄ２）があるので、寛永末が上限です。②田代観音。慶應本系にはありませんが県図本には比企ヶ谷に記載があります。田代観音は延宝８年 (1680) に火災に逢い、比企ヶ谷から現在地に移転しましたので、これは移転前の場所です。異系統とはいえ下限の手掛かりとなります。③鶴岡八幡宮の大鳥居。寛文８年 (1668) に完了した修復で海岸近くへ移動しますが、県図本・慶應本・本図 (Ｄ４) いずれもその位置は移動前のように見受けられます。④「ヲキ道」(Ｄ３) は「段葛」の古称で、「段葛」という呼称の初出は貞享２年 (1685) 刊行の『新編鎌倉誌』とされます。以上を総合すると、景観年代は寛永末以降延宝８年までの間、大鳥居の位置の判断が正しければ寛文８年までの間となります。本図の出発点となった最初の絵図が作成されたのもその頃とみてよいでしょう。

では本図が写されたのはいつ頃でしょうか。誤表記の累積などからも本図以前にすでに何度かの転写が繰り返されていることが想定できるので元図作成時からある程度時間が経過していると考えられますが、今のところ具体的手掛かりがありません。現時点では慶應本と県図本以外の諸本は未調査です。これらを含めて詳細な検討を進めればさらに多くのことがわかってくると思われます。今後を期したいと思います。

※白石克
「慶應義塾図書館所蔵相州鎌倉之図(江戸時代後期写)」(『斯道文庫論集』20　1984 年３月)

（こみや　まさあき・専門員）



▶当館ドームがデザインされた紙帽子

THE けんぱく PUNCH

神奈川県博で
開催されたイベントを
紹介していきます！

神奈川県博、再開館！

当館はおよそ２年間（698 日）休館し、おもに空調設備等の改修工事を行いました。休館中は事務所の移転先である宇徳ビル８階で、講演や講座を開催していました（詳しくは「博物館だより　通巻 207 号」をご覧ください）。

そして、４月 28 日（土）からようやく再開館し、皆様にご利用いただけるようになりました。空調設備改修のほか、常設展示パネルの一部刷新や、展示室内のカラーゾーニングが加えられ、より分かりやすい常設展示となりました。

また、展示品の解説を文字や音声で閲覧・視聴できる無料のガイドアプリ「ポケット学芸員」を新たに導入いたしました。この音声は県内の高校生が朗読しています。お持ちのスマートフォン等にアプリをダウンロードの上、ご利用できます。

▲知事らによるテープカット

▲ The Notes of Museum のお２人

４月 28 日（土）～ 30 日（月・振休）は無料開館日

再開館を記念した無料開館日には、のべ１万４千名ものお客様にご来館いただきました。再出発の門出にふさわしく、大賑わいの３日間でした。お越しくださった皆様、ありがとうございました！

無料開館中はイベントも目白押し。当館学芸員による特別展ギャラリートーク（29・30 日）や、音楽ユニット The Notes of Museum（28 日）と Tierra Cuatro（29 日）によるライブコンサートが行われました。こちらも満員御礼で、沢山の方々にお楽しみいただきました。

このほか、当館のドームがデザインされた紙帽子を配布し、オリジナルクリアファイルを贈呈しました。

次回以降の無料開館日は 11 月３日（土・祝）と３月 21 日（木・祝）です。皆様のお越しをお待ちしております！　　（こまつ　ももか・臨時学芸員）

◀当館営業部長・パンチの守がご来場の皆様をお出迎えしました

ホームページ更新中！　http://ch.kanagawa-museum.jp/

当館ホームページは３月にリニューアルし、より分かりやすいデザインに一新しました。
新企画「今月の逸品」も掲載中！当館学芸員が毎月一人逸品を紹介すると共に、展示室内での解説も行っています。
このほか、当館が開催する催し物への応募もこちらから。詳しくは「催し物」ページをご覧ください。

公式 Twitter
@kanagawa_museum

ワターシは当館営業部長「パンチの守」じゃ。
県博からのお知らせや、日々のあれこれをつぶやいているぞ。
皆の衆、フォローよろしくなのじゃ！

発行：神奈川県立歴史博物館
〒 231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：平成 30 年６月 20 日　印刷：文明堂印刷株式会社